

Topics

「島根県立石見美術館所蔵 水彩画家・大下藤次郎」
 所蔵作品展「特別展示・千葉県立美術館所蔵 近代日本の水彩画／
 千葉市美術館所蔵 無縁寺心澄・石井光楓」
 「夏休み特別企画 江戸へようこそ！浮世絵に描かれた子どもたち」
 所蔵作品展「スモールワールド」





『2014生涯学習アカデミーちば』（主催：公益財団法人千葉市教育振興財団、千葉市生涯学習センター）が去る4月12日に開校しました。お陰様で予想を上回る多くの市民の皆様からの応募がありました。お礼申し上げます。

その講師として、先般わたしも「日本美術鑑賞の一つの在り方」というテーマで話をしました。「鑑賞の一つの在り方」などと言いますと、一寸構えてしまう方もおられるかも知れませんが、簡単に言えば「日本美術の見方・楽しみ方」といったような内容です。身近に美術を鑑賞する場を持つと、日々の生活が豊かになるのではないかというわたしからの提案です。

以前に、このニュースで「日本人はインスタレーションの天才」と書いたことがあります（千葉市美術館ニュース66号）。インスタレーションとは現代美術の用語ですが、いまそこにあるもの、既存のものに新しく造ったもの、別のものを加えることで新たな創造的な造形美を創り出すという芸術活動のことを指します。

この最も新しい現代美術の芸術創作に通じるとも言えそうな美術の鑑賞を、わたしたちは1000年以上も前の平安時代から、ごく自然に行っていたのです。絵で、花で、その他の様々な造形物（いわゆる工芸品、調度品と呼ばれるもの）などを組合せて部屋を飾るということは、みなさんの日常生活の中にもあると思います。自分でそれをしなくても、人の家を訪ねたり、あるいはレストランやホテルの部屋に入ったときに、この部屋は綺麗だな、綺麗に飾ってあると感じて心が弾むことを経験したことはありませんか。

このように部屋を美術品・調度品で飾ること、調えることを、平安時代には、「設」、また室町時代には「室礼」などと言っています。そうした部屋を飾ろうとする、部屋に飾られたもの・美術工芸品を楽しもうとするところは、伝統的にわたしたちの中にもいまもあるのです。あまりにも無意識的なので、日ごろはそれに気付かないのかも知れません。「美しい」、「醜い」という美的な価値観は自分自身のもの、自分自身が決めることであって、他の誰からも強要されるものでないことは言うまでもありません。絶対という「こと」や「もの」は無いと言えましょう。ご自分の気に入った組合せで部屋や食卓を飾ってはいかがですか。

ところで、前述の講座で「美術館は社会教育の場であり、施設であるのはよくご存知のことですが、最近、美術館は福祉施設でもあるかも知れないと、わたしは考えるようになって来ました」と話しました。というのは、生きがいや日々の記憶を失いがちになる人たちに、過去に見覚えのある景色やものなどを見せることで、衰えた機能の活性化を図るという精神療法、臨床心理学の方法があることを知りました。例えば東京都内のある区では、高齢者に対して、彼らの育ったころの町の情景を描いた絵や写真を集めて図版にした冊子を配布しているということです。懐かしい風景やものを見ると心が豊かになり、人は元気になるのです。美術品には、

心のケアをし、病を治癒させる力があるのかもしれない。

美術館・博物館は、そんな懐かしい品々に出会うことの出来る宝庫・玉手箱のような場所です。かつて、あるいは現在でも「博物館行き」という言葉は、いまでは役に立たなくなったもの、使えなくなったものたちのいわば集積所という意味を込めて使われることがあるでしょう。本当は違うのです。たしかに、ものそれだけに限って言えば、過去の遺物であり、すでに現在ではその役割を終え、用途を失いつつあるものであるかも知れません。

しかし、美術館・博物館では、単なる過去のものとして忘れられようとしている、それらのもののうちに潜む、美的にも歴史的にも普遍性のある真の価値を見出し、光を当て、再び命を吹き込み、いまあってなお人々を感動させることの出来る優れた芸術作品として、皆さんにご覧頂こうとしています。

その担い手が学芸員であり、彼らこそ、それを実現化するため日々新たな努力を重ねる専門職集団なのです。学芸員を英語ではキュレーター curatorと言います。英和辞典には、管理者、監督、専門職員、時には館長という訳語も見えます。キュレーターは、キュレート curate する人といえるでしょう。これを動詞化し be curated とすると企画を推進するという意味になります。curate という名詞には、良さと悪さを両方持つという意味も含まれます。

アメリカで働くキュレーターたちと話したのですが、curate するというのは、混沌としている「もの」に対して一定の秩序を与え管理すること、そしてまたどの様な概念によって物語がそこに編まれているかが肝要だということでした。つまり、ひとつの切り口を見つけ出しそれに従って作品を集め、魅力ある展示にするというのが学芸員の仕事ということでしょう。因みに、curate の形容詞形である curative には、病気に効く、治癒力があるという意味もあるようです。

「水彩画家・大下藤次郎」、その次の「江戸へようこそ！浮世絵に描かれた子どもたち」、「籙木清方と江戸の風情」と企画展が続きます。いずれも、決してメジャーとは言えない、マイナーな作家であり作品かも知れません。しかし、わたしたちの美術館には、開催する展覧会ごとに、その作家、その作品の魅力を引き出し、観る者を惹きつけ、何かを伝えること、つまり発信する力があります。

千葉市美術館はこれからも、ご来館くださる皆様にとって素晴らしい作品との出会いの場を提供していきます。

[館長 河合正朝]



「生涯学習アカデミーちば」講義の様子

水彩画家 大下藤次郎

大下藤次郎(1870-1911)には一般のひとびとがイメージするような、芸術家然としたところがまるでない。

幼少のころから絵が好きだった、というようなことはあったかも知れないけれど、それはわからない。大下は筆まめで、自分の日々について驚くほどたんねんに記しているが、20歳を過ぎていきなり美術の世界に進もうとしたことのほかに読み取ることはできない。それは芸術へのあこがれ、というよりも気分としては実業家や法律家になることと同じであり、法律を学ぶということでフランスに渡った黒田清輝(1866-1924)が油彩画を学ぶことになったいきさつと似ている。黒田の場合よりはるかに自然かも知れない。だから、現存する大下の最初期の作品は拙い。こちらが、よく絵描きになろうと思ったな、と思うほど下手である。

それでは、大下は技量をどのようにして身につけたか。屋外でのスケッチもあったかも知れないが、まず真似からはじまっている。真似は模写も含む。写真とか、あるいは先達の作品から勘どころを学んでいる。彼の目で風景を見ていたとしても、任意の場所を選び、四角の枠で切り取って絵にする作業は、たとえば浅井忠(1856-1907)的な題材の選び方とか、構図によっている(大下は浅井に直接師事したことはないが)。これは、江戸期の粉本模写にちかい。もともと大下が器用だったということもあるのだろうが、「絵」として観ることができるレベルにまで達するにはそう時間はかかっていない。このままの段階に止まっても、大下は後世の研究者たちによって、明治時代の水彩画家のひとりとして遇されたと思う。しかし後年、彼はそこから別の段階に向かっている。

展覧会の担当者が考える大下藤次郎展の見どころのひとつは、明治に生きていたごく普通の一般人が、絵画で生計を立てることを決心し、どんどん技量を身につけ、みずからの感性を育み、ひとりの画家になっていくという、この過程にあると思う。彼はそのなかで絵画とか、風景画のありかたについて考えている。考えるといっても、観念的な、他人にわかりづらいところがない。徹底して現実的である。



このことは、大下が記した水彩画の入門書を読めばわかる。色の呼び方はまだ外来語のままだけれど(国産の水彩絵具は1870年代後半には製造が始まっていた)、空には何色、川には何色を塗ればよいと一々具体的に説明されている。これはわたしの推測だが、先輩や同世代の画家たちは、当たり前のように、天賦の才によって選ぶ色であっても、彼はひとつひとつ塗り方とか発色について試していたのではないか。いわゆるテストピースである。もちろん、輸入された絵画技法書も参考にしたかもしれない。仮にそうであったとしても、その洋書をかたわらに置きながらみずからが実際に試した結果が記されているように思われる。そのすがたは江戸期の蘭学者たちとさほど変わりはない。これが、彼が水彩画のパイオニアである理由となっている。

だから、大下以前にも水彩画を描いた画家は多いが、水彩画の何たるかを知らない一般人にイロハから教えることができた最良の導き手が彼だった。三宅克己(1874-1954)が入門書の序文で初心者に対して説くように、「これ絵画は数学の如く、一定不変の法式を以て現し得べきものでは無¹⁾いのだということ²⁾は、大下は言わない。「法式」を知りたいと思っている人間に、入口でそんなものは無いのだと言ってみてもはじまらない。そのことを一番身にしみて理解していたのが、大下自身ではなかったか。彼は、『水彩畫の栞』(1901)の「写生の方法」という章の冒頭ちかくで、「抑(そもそも)絵を描くといふことは文章を作ると似たる³⁾ところ多く…」と記している²⁾。絵は数学と違うという三宅と、絵は文章と似ているという大下。もうここでふたりの違いは明らかになっている。どちらが親しみやすいか。大下は言う。もし、神社を描こうとするなら、神社はその絵の主格(主語)だ。形を正しく把握して描くのがいい。その周囲にある数石樹木は主格をはっきりさせるためにある。説明は彼の絵のように平明で、わかりやすい。

じつは大下が記したこの一節は、三宅と大下というふたりの画家の資質を比較する以上に重要な意味を持っている。大下が使っている「文章」という語彙について、同時代の正岡子規(1867-1902)が提唱した「写生(文)」まで視野に入れて考えた時、大下が従来の風景観を変革してあたらしい風景画を創始できた—子規の「俳句革新」と同様でありながら、しかも彼のように戦闘的ではない—根拠があきらかになるからだ。子規が生涯持ち続けた時代精神としてのリアリズムを大下もまた共有していたのであり、後者はそのリアリズムが描かれている作品の内容に止まらず、水彩絵具というマテリアルとの対話(客観的な把握と分析)と、新しい風景画の創始というコンセプトにおいて発揮されているわけである。

大下は42才という若さで没したが、今回千葉県立美術館の御厚意によって、大下と同時代および、大下以後の画家たちによる水彩画も特別に展示するこ

(左から)《下駄屋の店先》1892(明治25)年、
《門と人物・小石川》1893(明治26)年
すべて島根県立石見美術館蔵



《館山》1896(明治29年) 島根県立石見美術館蔵



《穂高山の残雪》1907(明治40年) 島根県立石見美術館蔵

とになった。それらと比較して気付かされることは、大下の早すぎる晩年に制作された作品群には、構図や色づかい、筆致の点で昭和期に制作されたと言っても通用するような作例があることだ。大下は、後に続く画家たちが紆余曲折のすえに見出した地点にたったひとりで立っている。

[学芸課長代理 藁科英也]

- 1) 三宅克己「緒言」『風景水彩画集 描法解説 第1集』弘成館 1907年(データ等は原本破損のため現在の表記とした)
- 2) 大下藤次郎「寫生の方法」『水彩畫の槩』新聲社 1901年 p.29

島根県立石見美術館所蔵 水彩画家・大下藤次郎

2014年5月20日(火)▷6月29日(日)

[休館日] 6月2日(月)

[観覧料] 一般 1000(800)円、大学生 700(560)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金

※前売券はローソクチケット(Lコード:39356)、セブンイレブン(セブンコード:027-430)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(6月29日まで)にて販売

関連イベント

■講演会「かいて、つながる一表現者、大下藤次郎の魅力」
 講師:川西由里(島根県立石見美術館主任学芸員)
 5月31日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料
 ※当日12:00より11階にて整理券を配布

■講演会「趣味と実利と水彩画」
 講師:原田光(岩手県立美術館館長)
 6月14日(日)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料
 ※当日12:00より11階にて整理券を配布

■市民美術講座「あたらしいまなざし—大下藤次郎からはじまる風景画—」
 6月21日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料
 講師:藁科英也(当館学芸課長代理)

■「私が見つけた風景」展
 公募による水彩風景画の作品展を行います。
 展示期間:2014年6月17日(火)~6月22日(日)
 会場:1階 美術館エントランス
 対象:小学校4~6年生および中学校1・2年生(市内在住もしくは通学)
 応募締め切り:6月13日(金)美術館必着

特別展示・千葉県立美術館所蔵

千葉市美術館所蔵

近代日本の水彩画

無縁寺心澄・石井光楓

上田廣について

美術館が開館してはや20年ちかくなるが、いまだに房総の美術史でわからないことが多い。

おのれの不勉強のせいだが、たとえば北大路魯山人(1883-1959)の初期を支えた後援者に雑誌『楽土の房州』の発行人がいたという記録が、雑誌『星岡』にたった一箇所記されているけれど、それ以外では見かけたことがない。あるいは金沢に生まれ、「最後の茶人」と呼ばれた松山吟松庵(1870-1942)は保田に住んでいたが、その日常について詳しいことはわからない。

魯山人にしる吟松庵にしる、戦前のことがらであるから、仕方がないところもあるだろうが、戦後でもわからないことはいくつもある。辻清明(1927-2008)が戦後初めて窯を焚いたのは市内の稲毛だということが自伝に記されているものの、経緯やらどのような作品だったかということは判然としない。氏とは東京ですれ違

うことが何度かあったが、ついに御挨拶する機会がなかった。きわめつけは、金融関係にお勤めのサラリーマンで、アマチュアながらその作陶が高く評されている方が市内にお住まいだったらしいが、その情報を千葉市で聞いたことはない。

ないないづくしの文章になって恐縮だけれど、わからないことは記しておいた方がいい。どこでひょんな出会いがあるかわからないから。

戦前の千葉を描いた無縁寺心澄(本名・藤井茂樹 1905-45)のことは、これまで何回も当館の所蔵作品展で紹介しているが、その事蹟は本人による履歴書と、先達である千葉県立美術館の方々による調査以上のことはわからなかった。1938年(昭和13)に千葉市図案指導員として市の嘱託に採用されてから45年4月に亡くなるまでの間はずっと空白のままだった。

それが最近になって、1938年から42年ごろまでの4年ほどの間、単行本の装丁を多数手がけていることがわかった。それもすべてひとりの小説家にかかわっている。

小説家の名前は上田廣(本名・濱田昇 1905-66)という。

上田も房総ゆかりの作家で、長生郡豊栄村(現・長南町)に生まれている。幼い頃に千葉市に移り、小学校高等科を卒業後は鉄道省に入った。鉄道省といっても本省づとめなどではなく、千葉機関庫である。彼は、機関士になりたかった。東京の鉄道教習所で機関助手の勉強をして見習いにまでなったが、蒸気機関車の罐焚きが苦手であるという致命的な問題を克服できず、やがて機関庫事務に移る。文学へのあこがれは以前からあったようだが、この事務への配置転換が大きく後押しをしている。プロレタリア文学から創作に入った。その後、数多くの作家を輩出した同人誌『文芸首都』に参加。また、海野十三(1897-1949)との交流もあったとされる。

上田は1937年(昭和12)9月に応召し、中国に送られる。39年11月底召解除され帰還。この同じ月に単行本『黄塵』が改造社から刊行された。中国戦線での体験を基にした小説であるため、出版社は、当時「兵隊作家」としてブームになっていた火野葦平(1907-60 この年の3月に陣中で芥川賞を受賞している)の『麦と兵隊』(改造社 1938)などと「似た装丁の本にしたが、気の毒なほど反響が少なかった¹⁾」という。職場に復帰後しばらくして退職し、職業作家となった。

現在、上田と無縁寺の関係は、この「似た装丁」を無縁寺が手がけたところからはじまっている。二人がいつ、どこで知り合うようになったか。それは今のところわからない。無縁寺には《機関庫の昼》(本館蔵 1930)をはじめとして、千葉の機関庫を描いた水彩や素描があるから、かなり以前からお互いを知っていたと想像することはできる。とはいえ、ほとんど無名にちかい小説家が単行本を装丁する人間を指名できたのか、疑問が残る。しかも無縁寺は帝展入選の実績があるとはいえ、やはり地方の一家にすぎない。『麦と兵隊』の装丁が中川一政(1893-1991)だったことを考えれば、なおさらである。

しかし『黄塵』以後、無縁寺は1942年までに上田および彼が関わった単行本の装丁を9冊も手がけていることが現在判明している(データで確認したものを含む)。上田の単行本は、39年から45年までの間に20冊以上出版されているから、もっと増える可能性がある。無縁寺が同時期に手がけた上田以外の装丁は、小学生向けの童話集3冊があるが、小説は見当たらない。これは何を意味するか。やはり、上田の強い希望があったと考えて良いのではないか。また、作家・上田廣にかんする視覚的イメージは、無縁寺の装丁によって読者に広まっていったともいえる。

1945年4月、無縁寺は病気で亡くなった。

戦後、上田はGHQによって公職追放にあい、日本人からも批判されたために戦時中ほどふるわなかったが、鉄道や歴史をテーマとした小説を発表する一方で、日本国有鉄道が1950年代末から

準備を開始した『日本国有鉄道百年史』の編纂事業に参加したほか、千葉県一宮町史の編纂委員長を務めた。歿後20年を経て、一宮に石碑が建てられた。

上田の小説について、現在の文学史がどのような評価を与えているのか、わたしは知らない。ただ、無縁寺の装丁を探す中で目を通したかぎりでは、作者の真面目な姿が印象に残った。後から生まれた者のなかには彼の戦時中の活動を批判したい向きもあるかも知れない。しかし、中野重治(1902-79)が次のように語っていたということはおぼえておいた方がいい。孫引きになってしまうが、紹介しておきたい。

…戦場から送ってきた作品「黄塵」は戦争文学であると同時に転向文学でもあった。しかし上田の転向は彼らしいつつましいものだった。中野重治は、そうした態度を評して、露骨な居直りがなく、ふりかえり、ふりかえり、何かすまなそうな顔色で別かれてゆく、といっている²⁾。

[学芸課長代理 藁科英也]

- 1) 都築久義「上田広素描 戦時体制の文学者(三)」『愛知淑徳大学論集』7 1981年 p.33
- 2) 「大波小波 上田広の人と作品」『東京新聞』1966年3月3日・夕刊 坂本哲郎「近代小説に描かれた房総(二) プロレタリア文学と房総」『語文論叢』2 1973年 pp.69-70.による。



無縁寺心澄《機関庫の昼》
1930(昭和5)年
千葉市美術館蔵



上田廣『指導物語』装幀：無縁寺心澄
大観堂書店 1940(昭和15)年

特別展示・千葉県立美術館所蔵 近代日本の水彩画/ 千葉市美術館所蔵 無縁寺心澄・石井光楓

2014年5月20日(火)▷6月29日(日)

[休館日] 6月2日(月)

[観覧料] 一般200(160)円、大学生150(120)円

※()内は団体30名以上

※千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※「水彩画家・大下藤次郎」展ご観覧の方は無料

浮世絵に 描かれた 子どもたち

「子宝」という言葉はいつ頃から使われているのでしょうか。詳しい知識はないのですが、少なくとも江戸時代に頻繁に使われ出したのは確かではないかと想像しています。子どもを宝のように大事に守り育てた様子は、この時代に発達した浮世絵にもよく表されていますし、実際「子宝」という言葉が題になっている場合もしばしばあります。

おそらく浮世絵というと、美人画、役者絵、また風景画などを代表的な主題として思い浮かべるのが一般的ですが、実は子どもを主題とした作品というのも非常に多くあります。私自身、子どもをめぐる主題が浮世絵の大きな特色の一つであることになかなか思い至らずにいましたが、その認識をあらたにするきっかけもなったのが、今回ご紹介する公文教育研究会所蔵の子ども浮世絵コレクションです。30年近くかけて収集されてきた子ども文化資料のコレクションで、このうち約1800点の浮世絵版画は、近年インターネット上でも「くもん子ども浮世絵ミュージアム」として公開されています(<http://www.kumon-ukiyo.jp/>)。

ここに見る数多くの子ども浮世絵を通観するならば、子どもをめぐる日常的な生活の光景を題材とした浮世絵版画を、薄利多売の採算を成立させるほど多くの人々が、お金を出して買い求めたのだということの意味を考えざるをえません。子育ての様子、親兄弟との温かな触れ合い、素朴な心づくしの玩具や季節ごとの自然の中での遊び、一方で寺子屋での学習や諸芸のお稽古事にも熱心で、それらの要素がすべて浮世絵の中に描き出されてきたことは、驚きでもあります。

明治期に来日したエドワード・モース(1830-1925)は、「世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない。ニコニコしている所から判断すると、子ども達は朝から晩まで幸福であるらしい。」「[石川欣一訳『日本その日その日』東洋文庫]と書き残しました。また大人が一生懸命子どもと一緒に遊んでいる様子や、子どもが丸々として健康そうであること、子どもを怒っている親を見た事がないなど、幕末・明治期に来日した外国人たちは、日本の子どもたちが非常に大切にされ、幸福そうにしていることを印象深く驚きをもって述べ、「子

どものパラダイス」とさえ称するのです。

江戸の人々は、浮世絵にして手元に置くほどに、子どもを無条件に愛らしい存在として捉えており、ゆえに子どもたちも満ち足りていたということなのでしょう。今回の展覧会では、I 子どもへの愛情、II 子どもの成長を願う、III 江戸は教育熱心、IV 遊び好き・いたずら好き、V キッズ大行進一やつし絵・見立絵、VI 子どもの好きなお話、という6つのコーナーに分けてこのコレクションを見ていただこうと思います。美術として楽しんでいただきたいのはもちろんなのですが、子どもの生活や学習の様子など、広く江戸の子ども文化を知っていただくよい機会となるでしょう。さらに子どもとの関わり方や教育、遊びなどにおける本来のあり方についてあらためて考えさせられるところにも、このコレクションの意義があります。

この冬の大雪の時も、雪遊びに歓声を上げるような子どもの姿をほとんど見かけなかったのが気になったのですが、浮世絵に描かれたような、外遊びが大好きで、満ち足りた心身を持った子どもたちはどこへ行ってしまったのでしょうか。現実に戻ればスマホに夢中な娘が……江戸文化に多くを学びながらも反省の多い今日のごごろです。

[学芸課長 田辺昌子]



関連イベント

■ 講演会「浮世絵師たちの“子ども絵”腕くらべー歌麿・広重・国芳を中心にー」

講師：中城正堯(江戸子ども文化研究会主宰・国際浮世絵学会理事)
7月19日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料
※当日12:00より11階にて整理券を配布

■ 講演会「祈りをまとうーアジアの服飾に見る子どもの成長祈願」

講師：吉村紅花(文化学園服飾博物館学芸員)
8月9日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料
※当日12:00より11階にて整理券を配布

■ 特別企画「美術館で縁日！」

花輪茶之介さんによる飴細工の実演ほか、様々なお楽しみブースをご用意。大人も子どもも縁日気分をお楽しみください。

8月17日(日)13:00~17:00/1階さや堂ホールにて
※会場の出入りは自由です。

この他にもコンサートやギャラリートークなどイベントが目白押し! 詳しくはチラシをご覧ください。



※後期
展示



※前期
展示

(左) 勝川春章《正一位三冊稲荷大明神》天明期(1781-89) 公文教育研究会蔵

(右) 歌川豊国《風流てらこ吉書はじめけいこの図》享和4年(1804) 公文教育研究会蔵

江戸へようこそ! 浮世絵に描かれた子どもたち

2014年7月8日(火)▷8月31日(日)

[休館日] 8月4日(月)

[観覧料] 一般800(640)円、大学生 560(450)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金

※前売券はローソンチケット(Lコード:35731)、セブンイレブン(セブンコード:

031-042)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(8月31日まで)にて販売



スモールワールド



江戸のこどもたちの姿があふれるこの夏の特別企画「江戸へようこそ！」展と同時開催の所蔵作品展は、「こども」から連想した関連企画ということで、小さきものたちをいつくしみ、尊ぶ、美術の「スモールワールド」をくり広げてみることにいたします。

『枕草子』の「うつくしきもの」の段において、「なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし」とまとめられているのはたいへん有名です。「うつくし」とは、愛しい、かわいらしいといったことで、そこに列挙されたことの多くは、小さいこどものさまざまな仕草でした。その「小さきもの」の第一、こどもたち。江戸に続けて、当館所蔵の版画作品から、明治・大正時代の姿も見てみましょう。例えば来日した女性版画家ヘレン・ハイド(1868-1919)が繰り返し描いた母子の姿や子供だけの世界(図1)。母国アメリカへ向けた彼女の立場や時代環境からくる視線も感じられはしますが、赤坂の路地奥の日本家屋に住み、日々着物で通したというハイドがとらえた愛らしい子供たちの風俗は素直な描出のように見え、今日かえって新鮮に受け止められます。

「小さきもの」の第二は、『枕草子』では雀の子が挙げられたように、小さな生きものたちです。犬や猫という身近な動物を表した作品の展示のリクエストは館内外から強く、一部にお楽しみいただこうと思います(図2)。蓮の浮き葉の小さいのをつまんだり、塵に目をとめる行為なども特に挙げられていたように、小さい生きものが、もっと小さいものと触れ合う表現からは、「小さきものに神が宿る」といった言葉も思い出されてきます。そして今回は、虫という、さらに小さな存在をめぐる江戸時代以来の造形を集めます。草花の一部に虫がとまっている、そんな身の回りの小さな情景を描いてよしとするのは、江戸時代絵画の愛すべき美点の一つでした。じっと観察し、その能力に驚き、あるいは姿を愛でその声に耳を傾ける、しかしある場合には苦しめられもする…。小さい中に計り知れぬ大きな世界への入口があるような存在として敬意を払われてきた、前近代の虫たちを巡る文化は、詩的世界とも

結びつきやすいのでしょうか。江戸時代にはかえる(蛙)もかたつむり(蝸牛)も虫の範疇。虫を詠み込む恋の狂歌を喜多川歌麿の絵に添えた美しい絵入版本『画本虫撰』(タイトルロゴ横 喜多川歌麿/画『画本虫撰』一帖(部分) 千葉市美術館蔵)を頂点とし、その影響も色濃い『春溪画譜』(図3)などの表現を味わうと、虫のいる宇宙に思いをふくらませた人々の気分を追従できるような気がします。

『枕草子』は、うつくしき小さきものとしてこのほかに、雛の調度や、葵の小さな葉っぱ、鳥の卵や瑠璃の壺を挙げました。実際に大きさが小さいもの、丸みがあり、なめらかでつるんとした形のものも指しているようです。本展でもまた、小さいものやことながらを表す造形も取り上げてみようと思います。我々が日頃「ミュージアムピース」という言葉を意識しなければならないような「作品」とはまた別のものたち。小さいものを愛す、小さいことに意味がある、普通より小さいものにふれると浄化されるといった信仰や習俗など、何故にそんなに小さいのか、「小さきもの」へのまなざしから伝えられることのさまざまを、どうぞ大きな気持ちでお楽しみいただければ幸いです。

※なお、企画展「江戸へようこそ！浮世絵に描かれた子どもたち」および本展は、子ども支援を目的とした国際キワニスの大会「Tokyo Chiba Kiwanis Convention 2014」の千葉市開催を歓迎します。また7月8日(火)～7月21日(月・祝)の期間限定で、7階展示室8において、所蔵作品による特別展示を行う予定です。こちらもあわせてお楽しみください。

[学芸係長 松尾知子]

所蔵作品展 スモールワールド

2014年7月8日(火)▷8月31日(日)

【休館日】 8月4日(月)

【観覧料】 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

※()内は団体30名以上

※ 千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※「江戸へようこそ！浮世絵に描かれた子どもたち」展ご観覧の方は無料



(図1) ヘレン・ハイド《Butterflies》
木版多色摺 明治41年(1908)
千葉市美術館蔵



(図2) 長澤蘆雪《花鳥蟲獸図巻》一巻(部分)
寛政7年(1795) 千葉市美術館蔵



(図3) 森春溪/画『春溪画譜』一帖 文政3年(1820)
千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

2014年度上半期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

[時間] 14:00より(開場は30分前)

[場所] 11階講堂

[定員] 先着150名(入場無料)

※都合により開催日、講座名、内容の一部が変更となる場合がありますので、ご了承ください。

変更の際は各展覧会のチラシ、ホームページ等にてお知らせいたします。

○第3回 6月21日(土)

「あたらしいまなざし
—大下藤次郎からはじまる風景画—
[講師] 藁科英也(当館学芸係長)

○第4回 7月26日(土)

「江戸の子どもと浮世絵」
[講師] 田辺昌子(当館学芸課長)

○第5回 8月23日(土)

「小さきものたちの宇宙」
[講師] 松尾知子(当館学芸員)

◎2014年度下半期展覧会のお知らせ

かぶらきよかた 鏡木清方と江戸の風情	9月9日(火)－10月19日(日)
赤瀬川原平展	10月28日(火)－12月23日(火・祝)
プラティスラヴァ世界絵本原画展 —絵本をめぐる世界の旅—	2015年1月4日(日)－3月1日(日)

※都合により予告なく展覧会名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。



鏡木清方の表紙
が目印!

館内では年間スケジュールを配布中です。この年間スケジュール、切り取って一筆せんとしてもお使いいただけるのです。ご存知でしたか？お友達への展覧会のお誘いなどに、ぜひご利用ください!

◎編集後記

誰もが学校などで触れたことのある水彩画。「水彩画家・大下藤次郎」展では、水彩画の父と呼ばれた大下の作品を紹介することで、その魅力に迫ります。絵画制作などをされている方は必見ですよ!また、夏休みにあわせて開催する「江戸へようこそ!浮世絵に描かれた子どもたち」も親しみやすい展示で、小学生から大人まで一緒に楽しむことができるのではないのでしょうか。関連イベントも、水彩画公募展や、緑日、コンサートなど幅広い層の方にご参加いただけるものをご用意しております。夏休みにかけて、ぜひ美術館に遊びにいらしてください。

[広報 磯野 愛]



[開館時間]

10:00-18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[交通案内]

○JR千葉駅東口より

○徒歩約15分

○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて

「中央3丁目」下車徒歩3分

○千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分

○京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

○東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く

○地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan

<http://www.cma-net.jp/>

[発行日] 2014年5月15日

[印刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

